

鎌倉最後の日

安達真魚



鎌倉歴史文化交流館

頼頭の出仕

頼頭よりあきは、正和五年（1316）六月諏訪大社の大祝おおほろり諏訪盛重の末子として、信濃国諏訪で生まれた。諏訪頼重は、頼頭の長兄にあたる。物心ついたときから、大祝家の子供として、神事、学問、武芸、歴史、文化など多方面にわたって、人一倍励んできた。頼頭の持つ天性の賢さは卓越していたので、子供ながらに周囲から一目置かれていた。

頼頭が十一歳になった頃、一族の中で、頼頭を鎌倉に出仕させる話が持ち上がった。鎌倉の諏訪氏は、分家の諏訪直性じきしょうが当主で、北条得宗家の御内人みうちびと（得宗被官）である。（得宗というのは、もともと北条義時の法名であり、義時の直系子孫の家を「得宗家」と呼び、得宗の被官（得宗家の家臣）を御内人と呼ぶ）同じ御内人の長崎氏に次ぐ地位を務めている。頼頭の出仕は、諏訪大祝家として、優秀な人材を育て、鎌倉への奉公をより充実させようとするものであった。

嘉暦元年（1326）初秋、頼頭は、供の者とともに生まれ育った諏訪を後にして、鎌倉佐助ヶ谷の諏訪家の宿館へ向かった。屋敷は、源氏山から南側に延びた尾根と東側平地の際にあつた。古代に郡衙ぐんが（郡司の役所）があつた場所の近くで、もともとは、この地方の中心部にあたる場所であつた。屋敷のすぐ隣には諏訪神社が祀られており、鎌倉の諏訪氏が主管している。直性と一族の盛高らは、首を長くして到着を待っていた。

「待ちかねていたぞ、頼頭。大きくなったの。いくつになつた。」

直性は、目を細めて歓迎した。

「十一歳になりました。叔父上様も、皆様もお元気そうで、何よりでございます。」

歳の割には成人のような受け答えだった。

その後は、諏訪の様子や一族の安否、思い出など、しばらくの間、話が弾んだ。肝心の頼頭の今後のことについて、盛高が説明した。

「出仕先は太守様の弟、泰家様だ。出仕日は、そなたが鎌倉に到着してから決めようと思つていたので、まだ決まっておらぬ。直に決めようと思つている。」

太守様とは得宗北条高時である。頼頭は、出仕先が北条泰家ということとは聞かされていたが、詳細は把握していなかった。盛高自身は、諏訪の屋敷に居住している御内人ではあるが、泰家の直の配下になつていた。頼頭もその一人として出仕することになる。ただ、まだ若く、成人するまで武士として修業するため、泰家預かりとし、泰家の屋敷に寄宿することになつていた。

「出仕までには、まだ余裕がある。それまでゆっくり休んだ方がいい。それと、鎌倉のまちをよく見ておいた方がいい。」

盛高が、自らその案内をすることになった。

次の日の朝、盛高と頼頭は諏訪神社をお参りした後、鶴岡八幡宮を訪れた。そこから見える鎌倉のまちは、三方を山に囲まれ、南方は相模湾に面した土地で、狭い土地に武家屋敷

をはじめとした建物が密集していることが手に取るようにわかった。鎌倉は百年以上続く武家の都であり、政治の中心である。地方生まれの頼朝からみれば、すべてが異次元の世界であつた。南へ向かつて一直線に続く若宮大路の鳥居の先に海が見えるだけでも感動できた。これまで、何度も伝え聞いてきたことであるが、なぜ、どんな方法でここに武家の都を築かれたのか改めて興味がわいてきた。

鎌倉のまちは周囲が小高い山と駿河湾に囲まれた比較的平坦な土地で、山からは滑川などの河川が流れ込んでいる。武家屋敷などは、もともとあつた田畑の上に建設されたものだ。武家の都としては、それほど広くない土地なので、どうしても建物が密集する。また、土地不足もあつて、山の上や谷も利用されることが多い。「扇ヶ谷」^{おうきがやつ}、「比企ヶ谷」^{ひきがやつ}など「谷戸」^{やと・やつ}と呼ばれる地名も多くある。

二人は、若宮大路を南に向かって歩くことにした。若宮大路は、鶴岡八幡宮とともに鎌倉の象徴であり、まちづくりの

骨格をなしている。幅30間ほどの大きな通りで、両側は土手に囲まれている。土手は防御のためのものと推察できるが、東側の土手の方が少し高くなっているのは、幕府や有力者の建物が東側にあるためだ。東側の建物も西側の建物も若宮大路側に門は見当たらない。土手があるため、建物はよく見えなかったが、頼朝にはそれぞれの建物が立派に見えた。ただ、華美なものは見当たらず、質素な造りの屋敷が多いことを感じた。その時点での頼朝は、質実剛健なこの時代の流れなのか、幕府の方針なのか、その理由までは考えることはできなかった。少し歩くと、東側に若宮大路幕府と呼ばれるひとときわ立派な屋敷が見え、盛高から将軍が居住している屋敷であると説明を受けた。

そのまま、若宮大路を相模湾方向に進むと、建物が武家屋敷から民家や商店などに変わってきた。若宮大路と交差する大町大路までいくと、そこは「下^{しも}の下馬^{げば}」であり、若宮大路の土手が途切れている。その辺りは色町の入口であり歓楽街

であつた。その先には多くの商工業者や庶民が住んでおり、武家屋敷が山の手であれば、それに対する下町といえる地域であつた。商店を営む地域に関しては、幕府の統制があり、定められた七か所のみであり、ここもその一つであつた。さらに、大町大路を東側に入り、海岸に向かって行くと、材木座と呼ばれる、材木を商う店が並ぶ地域があつた。このあたりは、武家屋敷や神社仏閣の建築に使われる木材の集積地であつた。材木座は相模湾の由比が浦と呼ばれる海岸に面してゐた。

この海岸からは、東に三浦半島が見える、近くに人工港湾である若賀江島わかえのしまがある。若賀江島は、北条泰時の時代に築かれた人工港で、海から鎌倉への物流の入口であつた。西には、由比ヶ浜、稲村ヶ崎が見える。由比ヶ浜には、繫留されてゐるものを含め、数多くの船が確認できた。由比ヶ浜は漁師が多く住んでゐる海産業中心の村であつた。

ここまできて、頼頭は鎌倉の有り様を少しは理解できたようだ。

「鎌倉は興味深いまちです。まだまだ見ておくことが沢山ありそうです」

「そのとおりだ。鎌倉は奥が深い。名所、旧跡も多い。鎌倉五山、大御堂、二階堂永福寺、長谷寺、大仏、まだまだある。浄土宗、臨済宗、日蓮宗、鎌倉は仏教布教の中心になつてゐる」

盛高は得意げに言つた。若賀江島の大船を指して、

「あれを見よ。あの港にはいつも異国からの珍しく高貴なものが沢山入ってくる。その窓口になつてゐる。これから鎌倉で暮らすことになれば、いつでも見て歩く機会がある」

頼頭は、大きく頷うなずいた。そして、鎌倉という土地に対する期待で胸が一杯になつた。

頼頭の出仕する日はすぐにやつてきた。盛高に伴われながら、山内やまのうちにの泰家の屋敷に向かつた。諏訪氏の居館こがくろから、巨福呂坂切通を登り、建長寺を過ぎてしばらくすると、明月谷の入口がある。泰家の屋敷は明月谷の山あいにあつた。ここは、

北条時頼の頃より北条得宗家の山荘として使用されてきた敷地であり、閑静な場所であった。屋敷ではすでに泰家が待ちかねていた。盛高はいつもどおりの挨拶後、頼頭にも挨拶させた。

「諏訪頼頭にございます。若輩者ですが、なにとぞよろしくお願い申し上げます」

泰家は、頼頭の生い立ちをすでに聞いていたので、とくに聞き質すことはなかったが、

「弓馬は達者か。得意なものはあるか。」

「はい、弓使いには自信があります。」

「ほう、さようか。弓の名人になるには、体力もさることながら、忍耐心、探求心、向上心も必要じゃ。楽しみじやの。よろしく頼むぞ」

泰家にとっては、十歳くらい年下の頼頭は、かわいい弟分のようなものである。配下として迎えることができ、将来が楽しみになったようであった。

頼頭は、まだ年齢的に半人前なので、成人するまで泰家預

かりとなり、この屋敷に寝泊まりして、武芸、学間に日夜研鑽することになる。ひとしきり話しが終わった後、家人から屋敷内で生活する上での決まり事を説明され、寝泊まりする部屋なども案内された。その後、泰家から、一緒に母上のところへ行くと声がかかった。母上とは、大方殿（寛海円成、かくかいえんじょう）以下、円成尼（えんじょうに）で、安達一族の安達泰景（泰宗）の娘である。故北条貞時の側室であり、得宗北条高時と泰家の生母であった。円成尼は、この山荘の主として、泰家とは、別の棟に居住していた。

泰家らが山荘の客間で待っていると、円成尼は、年端のいかない娘と侍女を従えて現れた。泰家が頼頭を紹介した。

「母上、こちらが諏訪頼頭殿でございます。こたび私のもとへ諏訪より出仕して参りました。十一歳になります」

円成尼は、頼頭を凝視しながら、

「こなたが、諏訪のご子息であるか。かように遠い鎌倉までよくおいでくだされた。お疲れ様でしたな」

「お氣遣いありがとうございます。一生懸命ご奉公させていた
ただきたいと存じます」

「なるほど、十一歳にしては殊勝なもの言いだ。楽しみだな、
泰家」

泰家の方を向いて、同意を促した。

「さようでございます。諏訪家でもいい人材を遣してくれま
した。ありがたいことです」

円成尼は、側にいる娘の方を向いて、

「この姫は、瑠衣るいと申す。姫、良い遊び相手ができそうだな」

その娘は、笑顔で頷いた。頼頭も頭をへこりと下げ、それ

に答えた。頼頭としてもその場で素性を質すことは憚はばれた

が、姫と呼んでいるからには、名のある武家の娘であること

だけは推察できた。ただ、泰家や円成尼、瑠衣がどのような

人物で、どのような立場の人たちなのかについては、その時

点で、頼頭が詳しく理解しているわけではなかった。

円成尼との面談も終わって、頼頭はほっとした。出仕する

ことが決まっているとはいえ、北条一族の身分の高い人たち
との面談は、緊張の連続であった。頼頭は大きな解放感を感じ
た。これからは、与えられた勤めに励み、将来に向かって、
自分自身の身を立てることが使命であった。それが、鎌倉に
送り出してくれた家族や一族の人たちへの恩返しになると、
子供心に考えていた。

これで、頼頭の山内での勤めが始まることになり、諏訪か
ら鎌倉まで供をしてくれた家臣も安心して帰郷することが
できる。頼頭は知らない場所で暮らすことになるが、近くに
実家ともいえる諏訪の屋敷もあるので、郷愁に駆られること
も少ないだろうと、子供ながら自分を納得させていた。

安達氏

円成尼が出自した安達氏は、もともと北条得宗家とは親密
な関係にある有力御家人であった。北条時頼の母は安達一族

の娘であり、その嫡子の時宗は、安達氏の甘縄の屋敷で生まれている。時宗以降、得宗の貞時、高時には、すべて安達一族の娘が嫁いでいる。安達氏をめぐっては、頼朝が出仕するまえに、いくつかの事件が起きていた。

時代は少しさかのぼる。

貞時が執権に就任して間もなく、若年の貞時を支えていたのは、時宗時代から幕府を支えていた得宗外戚の安達泰盛であった。泰盛は、時頼の従兄弟であり、安達氏の家督を継いでいた。貞時時代には「弘安徳政」など、幕府の改革を行っている。弘安八年（1285年）十一月、貞時の乳母^{めのとぶ}夫である内管領平頼綱が、泰盛の進めた「弘安徳政」に反対し、讒言により自害に追い込んだ。泰盛一族は尽く討たれ、各地の泰盛派も追討された。これによって、頼朝が政権の運営を担うようになった。これを霜月騒動と呼ぶ。

しかし、正応四年（1291）、今度は、貞時が頼朝の政策を否定し、頼朝を滅ぼした。平禅門の乱と呼ばれる。乱の後

に、安達一族は復権することになった。円成尼は貞時に側室として嫁ぎ、安達一族の生き残りで、泰盛の弟の子孫である安達時頼も復権した。さらに、時頼の娘は、後に高時に正室として嫁いだ。瑠衣は時頼の末の娘である。頼朝の弟の子孫である長崎氏も再び取り立てられることになり、その後、両家ともに得宗を支えることになった。

貞時は、嘉元三年（1305）四月の嘉元の乱（北条家内部の権力闘争）をきっかけに、政治の舞台から降り、応長元年（1311）に死去した。得宗は高時が後継し、長崎高綱（円喜）と安達時頼が後見して政務を主導した。

その後、高時は、正和五年（1316）に十四歳にして執権に就任した。

高時が得宗を引き継いで、執権に就任したとはいえ、幕府の政務は長崎氏、安達氏、北条庶流などによる運営により、子細なく行われていた。高時は健康面でも問題があったが、もはや得宗高時が政務に関わることは求められていなかった。幕政から遠ざけられた高時が興味の対象にしたのは、仏

画、学僧たちとの交流など仏教知識に関することと、鬨犬、田楽など遊興についてであった。

高時が執権に就任した年の2年後、文保二年（1318）二月、京では、後醍醐天皇が即位した。その六年後の元亨四年（1324）九月、後醍醐天皇は、日野資朝・俊基らの側近を集め、討幕を計画するという、正中の変と呼ばれる事件が起こった。これは、密告により事前に発覚し、計画は破綻した。資朝・俊基は鎌倉へ送られ、資朝は流罪、俊基は罪を問われず京に戻された。首謀者の後醍醐天皇は無関係であると主張し、罪を免れた。一度目の討幕計画であった。

嘉暦元年（1326）三月、高時は出家し、執権を辞した。

頼頭が鎌倉に出仕する数か月前のことであった。

得宗家とその周囲では、執権の後任と得宗の後継者について内部抗争が起きた。内管領長崎高資は、御内人の五代院宗繁の妹と高時の間に長子邦時が前年十二月に生まれている

ので、これを得宗家の後継者として推し、中継ぎの執権として金沢貞頭を執権に推挙した。一方で、円生尼や安達時頭ら安達一族側は、御内人を母とする邦時の家督相続を阻止するため、高時の弟で円生尼の子泰家を高時の後継として推していた。

そのような状況で、貞頭が長崎氏の勧めで執権に就任した。しかし、円生尼ら安達一族はこれに不服であり、同日泰家も恥辱として出家し、貞頭の執権就任に不満を抱く多く人も、泰家に続いて出家した。さらに憤った泰家と円生尼ら安達一族が貞頭を殺そうとしていると風説が流れ、貞頭は在職十日ほどで執権を辞職し、出家してしまった。その後、泰家と円生尼ら安達一族の憤りを恐れ、しばらく執権のなり手がなかったが、最終的に赤橋守時が執権に就任することになった。嘉暦の騒動と呼ばれる。

円生尼は、安達氏の出自であり、政務には直接関与しないものの、安達一族の利害を常に考えていた。得宗の嫁には安達氏から立てることが本筋であり、安達時頭の娘を高時の正

室になったのは思惑どおりであった。しかし、この娘がまだ男子を生んでいないのが誤算であった。邦時にしても、その後生まれた時行にしても、側室の子であった。安達氏以外の娘の子である邦時の誕生には、円生尼も安達一族も不快の態度を示していた。

円生尼には、得宗家の継承について、以前より一つの宿望があった。執権の後継を泰家とし、ゆくゆく得宗の家督も泰家が継ぐことだ。実現すれば、病弱な高時に代わって、泰家が幕政の実権を得宗家に戻すことができる。その後、改めて安達氏の娘を嫁がせたいと考えた。円生尼は、安達時顕の娘である瑠衣を幼いころから預かっていた。預かる名目は行儀見習いであったが、泰家の得宗就任の目途が立てば、泰家に嫁がせたいという思惑であった。しかし、泰家の出家により、執権就任の実現の見込みがなくなったため、瑠衣を嫁がせることも沙汰止みの状態となっていた。

予兆

泰家邸での頼頭の勤めは、堅苦しいものではなかったが、規則正しいものであった。起床、就寝の時間も決まっていた。部屋は他の家人との相部屋であり、目上の者に対する礼節も欠かせなかった。日課の中心は、武芸と学問であり、それも時間が決められていた。体を動かすことも、書物を読むことも嫌いでない頼頭にとっては、充実した毎日であった。

自由に使える時間もあった。祭りや年中行事があるときには、暇をもらえることがあった。諏訪の屋敷に行ったときは、諏訪神社への礼拝は欠かさなかった。そのついでに、鎌倉のまちを見物するのが楽しみで、小さな路地にまで入り込んでまちの様子を観察した。少しずつ鎌倉のまちに精通していくことが喜びになっていた。年に何度かは、八幡宮の東方の広場で闘犬が行われるので、もの珍しさに何度か見に行った。

瑠衣とは、同じ敷地内にいたので、日常的に顔を合わせていた。頼頭の武道の稽古を、瑠衣が近くで眺めていることも

多かった。稽古の終る頃を見計らって、遊びの相手をさせられることもたびたびあった。瑠衣は、双六や貝合わせなどの屋内の遊びが得意で、大人とも互角の勝負をした。屋外の遊びでは、こま回し、竹馬、毬杖、羽子板、小弓、蹴鞠など、いろいろな種類があったが、瑠衣には年齢的に無理な種目が多かった。瑠衣は、頼頭からすれば、かわいい妹分であり、かけがいのない存在になっていた。頼頭と瑠衣は、傍から見ると兄妹ように見える。何かお祝い事でもあれば、円生尼から食事に招かれることも多く、そのとき瑠衣は頼頭の隣に着座すると決まっていた。

あるとき、頼頭は瑠衣の正確な年齢を知りたくて、干支を訊いてみた。

「そなたは、いつ生まれたのじゃ」

「未の生まれよ。己未。五月に金沢で生まれた」

頼頭は辰年生まれなので、自分より三歳年下なのだと分かった。ついでに、瑠衣は、そのまま子供なりに自分の素性を明かした。父親は安達時頭、母親は金沢政頭の娘で、金沢貞

頭の姪にあたる。母親の実家で生まれたらしい。

元徳三年（1331）四月、後醍醐天皇は、再び討幕を計画した。これも、密告のため事前に発覚した。日野俊基や僧の文観・円観らが捕縛され、鎌倉に送られた。このときも後醍醐天皇にまで処罰の手が及ばなかった。元弘の変と呼ばれる。

同年八月、鎌倉の幕府内部では、高時を絡む事件が起きていた。内管領長崎高資の専横を嫌う高時が、高資の叔父高頼らに高資を討伐させようとした。計画は発覚し、高頼らは捕縛され、流罪となった。高時は関与を否定したが、高時に主導権のないことが内外に知れ渡り、幕府の威信を失墜させた。この混乱をよそに、後醍醐天皇は内裏を脱出し、笠置山に籠城した。笠置山では兵を募り、挙兵した。これに対して、幕府は大軍を送り、九月に笠置山を陥落させた。後醍醐天皇は捕らえられて退位し、次の年の三月に、隠岐に配流された。後醍醐天皇の二度にわたる討幕計画は失敗に終わったが、

その後も楠木正成などによる討幕の動きは続いた。元弘三年

(1333) 閏二月、後醍醐天皇は隠岐を脱出し、船上山に

入って挙兵した。諸国に綸旨を発給して討幕を呼びかけ、反

幕勢力は各地に広がった。幕府は、六波羅探題を支援するた

め、鎌倉から名越高家と足利高氏を大将とする大軍を派遣し

た。幕府軍の六波羅合流後、名越高家は、山崎の赤松勢討滅

の進軍中、久家縄手にて討死した。一方、高氏は、後醍醐天

皇の討幕の綸旨を得て、丹波国篠村八幡宮で幕府への離反を

宣言し、六波羅探題を攻め、陥落させた。承久の乱以後、幕

府の朝廷監視の重要拠点であった六波羅探題は、北方・南方

ともに滅亡した。元弘三年(1333) 五月七日であった。

逃げた北方の北条仲時も近江で反幕勢に包囲され自害した。

元弘三年(1333) 五月二日、六波羅探題滅亡の五日前、

鎌倉では不可解なことが起きた。頼頭は、いつになく目覚め

が遅かった。泰家邸内に騒々しさを感じた。

「もぬけの空だ。誰もいないらしい」

ふすまを開けて、泰家が寢床に飛び込んできた。

「頼頭起きろ。足利がいなくなった。様子をみてこい」

頼頭は、すぐに事情を呑み込めなかったが、直ぐに身支度

して、大蔵の足利邸に向かった。金沢街道沿いの足利邸の周

りには、すでに状況を確認しようとする者が、大勢集まってい

た。人の話を聞くと、

「昨晚遅く逃げ出したらしいよ」

というだけで、いつ、どこへ逃げたのか、逃亡の理由など

皆目わからない様子であった。ただ、足利邸は、すぐ東方に

朝比奈の切通があり、鎌倉から脱出しやすい場所であったこ

とは確かであった。集まった者たちの頭の中には、「足利謀

叛」の文字が脳裏に浮かんでいたに違いない。頼頭は、状況

を知らせにすぐに山内の邸に戻ったが、泰家はすでに邸内にはいなかった。

小町の得宗邸には得宗高時をはじめとして、執権赤橋守時、

長崎高綱・高資、安達時頭ら主要な者が集まって、評定が始

まっていた。泰家も得宗家の一人として、特別に呼ばれてい

た。

注目を浴びたのは守時であった。守時は同母の妹である登子を高氏に嫁がせている。逃亡したのは、守時の同母の妹である登子と、高氏と登子の間に生まれた甥の千寿王である。高資が問いただした。

「執権殿は、この始末をご存じであったのか」

守時自身も、全く承知していなかった。

「わかるはずがありません。足利の家臣の輩が、独断で千寿王を連れ出したに違いありません」

守時とすれば、高氏の謀叛ではなく、足利の反動分子が起こした暴挙だと強調したかった。

「しかし、どんな理由であれ、人質であるべき足利の母子を逃亡させてしまったことは、重大な落ち度であろう。評定が終わり次第、謹慎なされたほうがいい」

高資が執権に命を下したようなものだが、高時はじめ異論をはさむ者はいなかった。

泰家が声を上げた。

「とりあえず、追っ手を差し向けてはいかがであろうか」

高時が首を横に振りながら、一蹴した。

「それは無理だ。朝比奈を過ぎれば、すぐに六浦ではないか。もう手遅れだ。すでにどこかの湊に向かっているかもしれない。しかも、追っ手を差し向けるとなれば、大騒ぎになるではないか」

高時は冷静だった。高氏の謀叛の疑いを鎌倉中にこれ以上広めたくなかった。高時は続けた。

「どうであろう、高資殿。早急に都に使者を使わして、都の様子を探ってみてはいかがであろうか」

「それは良いお考えでござる。皆さんの異存がなければ、早速、手配いたしましょう」

高資は、そこで評定を終わらせ、その日のうちに長崎氏と諏訪氏の中から一人ずつ、計二人の使者を選び、都に向かわせた。しかし、その使者たちは都までたどり着くことはなかった。たどり着く前に六波羅探題は陥落していた。鎌倉からの使者たちは、名越高家討死と高氏謀叛を知らせる急使に、

途中駿河で行き会ったため、そこからすぐに鎌倉へ引き返した。

義貞挙兵

六波羅探題が陥落した次の日、五月八日、新田義貞は、上野国新田郡の生品神社で一族百五十騎を集め挙兵した。義貞は、この三月に病気を理由に、千早城の戦いから無断で新田荘に帰っていた。他の東国武士と同様、すでに後醍醐天皇から討幕の綸旨を受け取っていた。さらに、討幕については、足利との密約もあった。挙兵を決意するきっかけとなったのは、楠木正成討伐のための徴税にやって来た二人の幕府の使者を拘束し、そのうちの一人を殺害したことだった。義貞は、徴税の理不尽さに憤慨していた。討幕に確実な成算があったわけではないが、後戻りはできなかった。集まった一族の前で、義貞は高らかに宣言した。

「後醍醐天皇から綸旨はここにある。これまでの幕府の専横は許しがたい。今ここに立ち上がって北条一族を打ち果たそう」

決起した一行は、長楽寺の門前町であり、地域屈指の商業地であった世良田宿を経由し上野国府方面へ兵を集めながら北上した。一旦北上したのは、国府軍への示威行動であり、越後方面からの一族の合流を待たためでもあった。国府を預かっていたのは、御内人長崎氏の一族であったが、すでに新田軍の規模が大きく、手の打ちようがない状態であったため、鎌倉へ知らせの使者を送ることくらいしかできなかった。新田軍は利根川を渡河し、鎌倉へ進軍した。周囲の武士の多くも合流したため、大きな軍団へと膨れ上がっていった。

五月九日、幼い千寿王が家臣に連れられ、二百騎ほどで新田軍に合流した。千寿王は鎌倉を脱出した後、世良田宿の長楽寺に匿われていた。新田軍が世良田を通過後、すぐに体制を整え、後を追ったことになる。これによって、上野、下野、上総などの足利ゆかりの氏族も馳せ参じた。足利氏の出陣命

令に応じたものだ。新田・足利連合軍が成立したことにより、その軍勢はさらに雪だるま式に膨れ上がった。

一方、幕府には五月九日の時点で、義貞挙兵の報がもたされていた。その日の評定で、金沢貞将に下総国下河辺に出陣させ、上総、下総の軍勢を伴って新田軍を背後から攻撃するように命じた。正面からは、桜田貞国を大将、長崎高重を副将とし、鎌倉街道上道を入間川へと出陣させた。五月十日には、入間川を隔てて両軍は退陣した。幕府軍から見て、新田軍は思いの外、大軍であった。

五月十一日辰の刻(午前8時頃)、新田軍は入間川を渡り、戦闘が開始された。矢合戦から始まり、騎馬戦が繰り返され、日没までに、新田軍三百騎、幕府軍五百騎を失う激戦となった。両軍とも疲労し、新田軍は入間川、幕府軍は久米川にそれぞれ退却して、陣をとった。翌日朝、新田軍は久米川に攻め入り、この日も激戦が続いたが、幕府軍は破れ、分倍河原まで退却した。新田軍も疲労のため追撃できなかった。

五月十二日、鎌倉には初戦での敗北の知らせが届いていた。ちようど、六波羅探題陥落を知らせるため、駿河から引き返してきた使者が戻ったところであった。だれもが、危機的な状況であり、総がかりで迎撃しなければならないことはわかっていて。本来、支援軍勢の総大将として得宗高時が出陣するべきであったが、病弱な高時には無理であった。順当な成り行きで泰家が総大将として選ばれた。泰家の下には、戦いに秀でた数多くの武将が配置されることになり、万全の体制が整えられた。

泰家は、山内の自邸に戻ると、皆に告げた。

「義貞討伐の総大将となった。鎌倉の底力を見せてくれる。皆もそのつもりで頼むぞ」

出陣することは、義貞挙兵の知らせを聞いて以来覚悟していた。戦支度は整っていたが、指揮系統を整理し、それらを連絡して確認するなど、やたらと忙しかった。手元の配下に役割、分担を指示するだけでも大変であった。

頼頭にも声をかけた。

「そなたは初陣であつたな。とはいつても、わしも初陣だ。よろしく頼む」

「ありがたきお言葉。精一杯、働きます」

「お前はわしと一緒に。戦の様子をよく見ておくのだ」

頼頭は、実践の経験はないが、剣、弓、それと体力には、人一倍自身があつた。戦場での自分の使命は、泰家様を警護することだと、しかと心に刻んだ。

頼頭は、円成尼の屋敷に向かった。泰家から出陣の段取りの詳細などを円成尼に伝えておくように頼まれていた。円成尼に伝え終わって帰ろうとしたとき、背後から瑠衣の声がかかった。頼頭は少なからず期待していた。

「ちょっと待つて。睡蓮の花を見ていつて。今年も咲き始めたわ」

「そうだ。今年もきれいに咲いたかな」

「咲き始めといつても、もう見ごろよ」

瑠衣は、自慢げに池のある場所に誘つた。

「今年も見事だね。この屋敷に来て、この花を見るようになってから、何年経つのだろう」

頼頭は自問したが、瑠衣が答えた。

「もう7年目よ。また、秋まで、しばらくは楽しみだわ」

頼頭に時間の余裕があるわけでないが、二人はしばらく歓談した。近頃は、たまにしか会えていなかった。言葉にできないものの、幼いころからの思いを確認できる貴重な時間であつた。

「睡蓮の花言葉、何か知つている。円成尼様から聞いたけど、純潔、清浄という意味があるらしいわ」

「いい花言葉だね。瑠衣にぴったりだ」

睡蓮には、死や滅亡の暗示があることを、頼頭は知つていた。しかし、言葉には出せなかった。

五月十三日、泰家は、円成尼とその家人が見守る中、直の配下数十人を伴つて、山内から出陣した。家人たちは、手を振りながら笑顔で見送る者、頭を垂れて祈るように見送る者、

様々であった。円成尼は口を堅く結んだまま、泰家を凝視しているようであった。側にいる瑠衣は、困惑した顔で、馬上の泰家と頼頭交互に視線を送っていた。頼頭は、笑顔で瑠衣を見つめるばかりであった。

五月十四日、泰家の軍勢は、夕方までに分倍河原に到着した。この大軍の到着で、これまで戦い続けてきた武将たちの戦意は、再び高揚した。泰家は、軍議を開き、明日の作戦を綿密に練った。

五月十五日、新田軍は、幕府軍が補強されているとも知らず、未明からときの声をあげて分倍河原の幕府軍に攻め込んできた。幕府軍は、一旦それに応戦すると見せかけて、その後少しづつ後退した。新田軍は、それを追いかけて幕府軍の近くまで攻め込んだとき、構えていた幕府軍の弓手は一斉に矢を放し続けた。新田軍が体制を崩すと、幕府軍は前面と両側面から新田軍を包囲するように切り込んでいった。新田軍は、多くの討死者を出し、総崩れとなった。義貞は、決死の思いで退路を開き、狭山堀金まで敗走した。

泰家は、作戦どおりの成果に満足だった。これで、当面の関東の討幕勢力は駆逐できたと思っていた。

「皆の者、ご苦労であった。今夜はゆっくり休め」

頼頭は、何か不安が残っていた。

「泰家様、明日は早朝から、また攻めてこないでしょうか」
「あれだけ足早に退却していったのだ。まさか、再び攻め込んでくるようなことはあるまい」

しかし、この判断は誤っていた。義貞を追撃し、討ち取っていれば、その後の展開は違うものだったかもしれない。まさか、別の形で現実となった。足利氏の出陣要請を受けた三浦義勝が相模勢を束ねて、義貞の援軍として到着していた。五月十六日、幕府軍の側面に近接していた三浦軍は、夜明け直後、幕府軍に対して奇襲攻撃をかけた。寝込みを襲われた幕府軍は武器をつける暇もなく防戦した。そこに退却していたはずの新田軍も攻撃したので、幕府軍の兵は、誰も指揮をとることができず、散り散りに敗走していくしかなかった。泰家も配下の頼頭らとともに馬で退却を始めた。しかし、多

摩川の南岸、関戸のあたりで敵側の二十騎余に包囲されてしまった。たまたま通りかかった幕府軍の弓の名手が、敵を次々と射落とした。頼頭も、泰家の盾となりながら、馬上から弓で敵を攻撃した。さらに、北条家臣三百人余らも引き返してきて、その場に踏みとどまり応戦したので、泰家は無事にその場を脱出することができた。

幕府軍の将兵たちが鎌倉に戻れたのは、その日の夜以降で、いつ敵に追いつかれるかという恐怖のなかでの退却であった。無事帰り着いた者はいいが、すでに戦死した者も多く、負傷兵も数多くいた。隊列も乱れたままで、帰着の時間も、人それぞれであった。辻々に迎えに出る者も多かったが、将兵たちの悲惨な状況を見て、何と声をかけていいか、困惑するばかりであった。泰家らは、山内に戻ると、失望と疲れで、次の日の朝が明けるまで、死んだように眠り続けた。

鎌倉合戦

五月十七日、新田軍は、ひとまず関戸に陣をおいたまま、体制を整え、鎌倉攻略の作戦を練った。新田軍の勝利を知って、軍勢はますます膨れ上がっていった。

新田軍は、関戸から鎌倉街道を南下し、鎌倉の西側へ向かった。鎌倉は、山と海に囲まれた天然の要害であり、進入路は限られている。新田軍は、進入路を巨福呂坂切通、化粧坂切通、極楽寺切通に決め、軍勢を三手に分けて進軍した。

一方、鎌倉の幕府内では、泰家が負けて戻ってきたことで、誰もが危機感を覚えていた。下河辺に派遣されていた金沢貞将も敗戦して戻っていた。しかし、降伏という選択肢はあらず、鎌倉を死守する方針は決まりごとであった。新田軍が軍兵を三手に分けて押し寄せてくると知り、幕府軍も、巨福呂坂は赤橋守時、化粧坂は金沢貞将、極楽坂は大仏貞直をそれぞれ大将として配置し、劣勢になったときの補強の将兵も鎌倉内に残す体制を整えた。

五月十八日巳の刻（午前十時頃）、合戦が始まり、終日終夜

の攻防戦となった。

巨福呂坂を任された守時は、防衛というより、巨福呂坂より先の須崎の敵陣に攻め入った。守時は奮戦して、敵陣の深くまで攻め込んだものの、それまでに大半の将兵を失ってしまった。守時はここを死に場所と決め、自害した。妹の婿である高氏の背信を恥じたものだった。配下の多くも後にについて自害して果てた。守時の軍勢が壊滅したため、新田軍は、山内まで攻め込み、円生尼の山荘まで敵兵が近づいてきた。状況を察した金沢貞将は、軍勢の一部を巨福呂坂に派遣し、新田軍の進入を防いだ。

化粧坂は、鎌倉の中心に近いだけに、両軍ともに多くの兵力を割いていた。義貞もこの方面の攻撃の中心に陣取った。新田軍は、他の切通と同様、次々と新手の兵と入れ替わって攻めた。一方、幕府軍も、防衛に有利な狭い難所に陣取って交代しながら敵の侵入を防いだため、戦いは膠着状態となり、消耗戦となった。

極楽坂方面では、極楽坂切通の他に、稲村路という、海岸

沿いのもう一つ進入路が考えられた。その路は、稲村ヶ崎から由比ヶ浜に至る波打ち際の小道で、干潮になると、干潟になった。稲村路の由比ヶ浜に向かつて左側は、りょうぜんさん霊仙山の山域であり、急峻な崖になっている。幕府軍は、この稲村路からの侵入に備えて、路上へ隙間なく逆茂木さかもぎを設置するとともに、崖上にある仏法寺に兵を配置して、矢や石で崖下を攻撃できるようにした。さらに、沖の軍船から横合いの矢で攻撃できるようにしたため、この路を突破するのは困難であった。

この日の午後、極楽坂方面の大將であった大館宗氏の率いる新田軍の一部が、干潮で干潟になった稲村路を突破し、前浜あたりまで進出し、一部の在家を焼き打ちにした。しかし、これは幕府軍に撃退され、大館宗氏は討ち取られた。

五月十九日、二十日、二十一日、すさまじい攻防戦が続いた。矢が尽きれば、戦死者を乗り越えて斬り合う繰り返しであった。幕府軍はよく守っているが、軍勢の数で勝り、交代で休みなく攻め続ける新田軍が有利であった。義貞は、大館宗氏が討たれたため、化粧坂から精銳の将兵を率いて、極楽

坂方面の支援に回っていた。二十一日、義貞は、幕府軍が立て籠もる靈仙山の仏法寺を戦いの要衝とみて、この攻略を目指した。ここを攻略すれば、軍船からの攻撃を除いて、稲村路から突破も容易になり、一つの進入路を確保できる。さらに、靈仙山全体を手中にできれば、極楽坂切通での戦いでも、山の上から攻撃している幕府軍の背後に回れると考えた。しかし、仏法寺の攻略は困難を極めた。靈仙山の峰から山を登ったの攻撃であったので、仏法寺からの厳しい反撃を受けた。山門を打ち破って、仏法寺を攻略し、靈仙山を制圧できたのは、その日の夜半であった。

鎌倉炎上

五月二十二日、極楽寺方面の新田軍は、靈仙山から山を下って攻撃できるようになったため、二手から挟撃できるようになった。これによって、極楽寺切通を守る幕府軍は、混乱

に陥り、由比ヶ浜まで後退し、大仏貞直の軍勢は全滅した。さらに、巨福呂坂、化粧坂でも極楽寺方面の壊滅に呼応するかのように、幕府軍は劣勢に立たされ、突破されつつあった。

山内には、泰家も円成尼もまだ残っていた。

泰家から状況確認の命を受けた頼頭は、巨福呂坂を下った。巨福呂坂より西側一帯は戦闘中で、まだ持ちこたえていた。しかし、雪ノ下に近づくにつれ、武装している者、していない者が入り乱れて騒然としているのがわかった。遠く、由比ヶ浜の辺りから煙が上がっているのが見えた。

「極楽寺が破られた。攻めてくるぞ。早く逃げろ」

けたたましい声が、どこからとなく聞こえた。

「太守様は、葛西谷かさいがやの東勝寺に避難された。防備を固めよ」

頼頭は、途方もない状況に動揺し、山荘にとって返し、泰家に報告した。

泰家は、これから自分がなすべきことを考えていた。そこへ、盛高が悲壮な顔をして飛び込んできた。

「泰家様、もうこれまでにございます。直性もすでに葛西谷の太守様のもとへ向かいました。泰家様がご自害なされば、私どもは直ぐに後を追います。」

泰家は、首を横に振って答えた。

「さてさて、盛高。私には考えがある。ここで北条が敗れたとしても、必ず再興させる。そのために私は生き延びる所存だ。兄上の子供達も助けたい。万寿丸（北条邦時）は五大院宗繁に頼んだ。亀寿丸（北条時行）は、そなたが助けてほしい。扇谷おうぎがやの新殿（高時側室）から亀寿丸を引き離し、諏訪に逃亡させてくれぬか」

「承知いたしました。仰せに従います」

盛高は、涙を押さえながら答えた。

泰家は、続けて頼頭に命を下した。

「そちは、何人かの手勢とともに、母上と家人たちを、金沢の屋敷に届け、匿ってもらえ。その後は諏訪へ落ち延びよ。無事に帰り着いたならば、亀寿丸のことも頼む」

さらに付け加えた。

「身の安全を確保できればだが、鎌倉の最後を見届けてほしい」

頼頭には、どのように見届ければいいのか、その場ではわからなかった。盛高と頼頭は、諏訪の手勢を二つに分け、行動に移した。

泰家は、二人を見送った後、手元に残った配下を集めて、言い伝えた。

「今はこれまでぞ。皆、これまでよくやってくれた、礼を言う。しかし、私はあきらめてはいない。ひとまず奥州へ落ち延び、必ず北条を再興するつもりだ。奥州をよく知っている二人を連れていく。他の者はここに残って自害し、わしも自害したと見せかけてほしい。逃げたいものは逃げよ、恨みには思わぬ」

「かしこまりました。命に従います」

配下の一人から声がかかると、同時に全員が賛同した。屋敷に火をかけ、次々に自刃していった。

頼頭は、円成尼ら山荘の住人を警護しながら、金沢街道の朝比奈切通方面に向けて、一目散に逃げ始めた。一行は、女、年寄りが多いので、急ぎ足とはいかなかった。焦る気持ちを抑えて、冷静を保とうとした。

八幡宮の入口まで来たとき、その先には柵が張られ、通行ができなくなっていた。柵の傍らには多くの幕府軍の将兵が臨戦態勢をとっていた。高時ら北条一門が東勝寺に逃げ込んだため、進入口を封鎖するためだった。

「ここは通すことはできぬ。引き返せ」

頼頭は困り果てた。しかし、嘘をついてでも通らなければならなかった。

「諏訪頼頭と申す。これは円成尼様である。東勝寺の太守様に挨拶に行くので、通されたい」

将兵たちは何やら相談した後、かしこまりながら黙々と道を開けた。円成尼が輿から降りて検閲されることもなかった。通過できた一行は、金沢街道をそのまま進み、途中右に折れて東勝寺方面へ行くことはなかった。言葉通り東勝寺へ行け

ば、全員自害することになったと、頼頭は確信していた。

頼頭らは、日が暮れる前までには、円成尼らを金沢の屋敷に届けることができた。長く困難な道のもりであった。

頼頭は円成尼らに感謝の挨拶をした。

「長い間お世話になりました。これから諏訪に向かいます。皆さま、どうぞご無事で」

円成尼は一振りの刀を手荷物から取り出した。

「これは、北条家に伝わる『鬼丸』じゃ。無事に諏訪に戻れたら、これを亀寿丸に渡してほしい。われの最後の願いじゃ」

頼頭は、涙にurenながら刀を受け取ると、瑠衣に目を向けながら、

「元気にくらせよ」

「頼頭様・・・」

言葉は続かなかったが、心の中は「一緒に連れて行ってくれ」と叫んでいた。

この頃、新田軍に攻め立てられ、葛西谷の東勝寺に籠もつ

ていた高時から北条一門らは最後のときを迎えていた。なすすべもなく自ら火を放ち、次々と自刃していった。北条一族と家臣だけで二百八十三人、後に続いた兵を合わせると八百七十余人の人が自害し、百五十年続いた鎌倉幕府は滅亡した。

頼頭には、泰家からのもう一つの命があった。鎌倉の最後を見届けることであつた。そのためには、鎌倉の市中に戻るのが一番良いが、それはあまりにも無謀であつた。そこで、鎌倉北部の尾根伝いの道を行けばいいと考えた。日頃の軍事訓練で、十王岩という場所から鎌倉の市中を見渡せることを知っていた。そこは、住んでいた山内の屋敷の裏山の近くであつたし、諏訪に向かうのには鎌倉街道上道を利用できるので、近道にもなり好都合であつた。

日が長い時期とはいえ、見渡せる場所にたどり着いたのは、宵闇が近づいてきた頃であつた。若宮大路の両側を中心に、鎌倉の市中全体がまだ火炎に包まれていることが、はつきりと見てとれた。頼頭にとっては、胸が締め付けられるような

悲しい光景であつた。それが、鎌倉最後の日であつた。故郷を離れて鎌倉ですごした七年、泰家様、瑠衣のこと、多くの亡くなった人々、もう何もなくなってしまうた。あまりにも大きな喪失感で、涙が止まらなかった。

鎌倉幕府滅亡後しばらくして、円成尼らは助命されて、遭された北条一族の女性たちといっしょに伊豆の北条邸に移住していた。瑠衣もその一人であつた。伊豆は北条氏の本拠地であり、故郷であつた。源頼朝が挙兵したのもこの地であつた。足利氏からは、この邸宅と上総国の所領一か所が安堵されていた。この邸宅には、北条一族ら鎌倉の合戦で命を落とした者たちを供養するために、円成寺が建立された。円成尼は、一族の菩提を弔いながら余生を送り、幕府滅亡の十二年後、康永四年（1345）八月、この地で亡くなった。その僧職は、瑠衣が継承した。

伊豆に移住後しばらくの間は、瑠衣と頼頭ふみとの文の交換は何度かあつた。しかし、いつしか消息が途絶えたままになっ

た。円成尼も亡くなり、瑠衣には山内での思い出話を語る相手もいなくなってしまった。それでも、僧職を引き継いだことは、大きな励みになった。瑠衣はまだ若かった。改めて、仏門に帰依していく自分を模索し始めようとしていた。

円成寺は、同じ鎌倉山内を在所としていた伊豆国の守護、山内上杉氏の庇護を受け、上杉氏の尼寺として栄えた。

(了)



睡蓮の花

主な参考著書

北条氏150年 栄華の果て―鎌倉幕府滅亡―
(鎌倉歴史文化交流館企画展資料)
2024/9/21

東関紀行全釈
武田 孝 1993/1/20

中世の村を歩く
石井 進 2003/3/25

人物叢書
峰岸 純夫 新田義貞 2005/5/10

完訳太平記 卷第十(現代語で読む歴史文学)
上原 作和、小番 達(監修)
2007/3